

北九州市立  
文学館

# 友の会会報

第10号

令和2年1月

## 文学とサッカーの架け橋に スポーツ哲学研究所を設立



### ギラヴァンツ北九州社長 玉井行人さんに聴く

サッカーJ2に復帰を果たした「ギラヴァンツ北九州」は昨秋「スポーツ哲学研究所」を開設しました。研究を通じて文学をはじめとする文化とスポーツとの橋渡しをというプロスポーツクラブとしては画期的な試みといえます。所長に就任したギラヴァンツ社長で、作家の火野葦平（1906～60）を伯父に持つ若松出身の玉井行人さん（62）＝元西日本新聞北九州本社代表＝に、後藤みな子会長が研究所設立の背景や文学への思いを聞きました。

#### ——スポーツ哲学とは耳慣れない言葉ですね。

「スポーツとは何か」を研究する学問領域です。1970年代に欧米で始まり、スポーツの持つ意味や価値、社会で



「勝敗を超越して愛されるクラブを作りたい」と話す玉井さん

#### ——研究所設立の背景を教えてください。

私はギラヴァンツを、ただの興行会社ではなく、スポーツをコンテンツにして地域の価値を見出し、共に成長していく

の役割などを広範に研究しています。講演会開催や大学などと連携した提言の発信などを通じて、地域文化の向上を図っていきたくと考えています。



玉井金五郎が起こした「玉井組」の半纏を着た父・政雄さんと玉井さん。アフガニスタンで亡くなった「ペシャワール会」現地代表の中村哲さんは金五郎の孫、玉井さんのいとこにあたる。

#### ——玉井さんも祖父は葦平の小説「花と龍」に登場する沖仲仕の親分の玉井金五郎。お父様は葦平の弟でやはり作家の玉井政雄さん（1910～84）ですね。

私も父からは「困った人がいたら助けなくてはいけない」と言われて育ちました。若松の美家は風呂とトイレ以外は本

ブランディング会社と思っています。そのようなクラブにするためには哲学が必要。それを追求するための研究所でもあります。鉄と石炭を基軸に形成されてきた北九州は労働者が汗を流しながら創意工夫を凝らして技術革新を進めてきた街。「川筋気質」という言葉に示されるボランティア精神もあります。そのプライドをクラブに注ぎ、北九州ならではのサッカースタイルを確立したいと思います。

#### ——文学館や友の会もスポーツ哲学研究所と一緒に何かをしたいですね。

文学や美術、演劇などは好きだがサッカーには関心がないという人にも、スタジアムに来てほしい。「スポーツ哲学研究所」と名乗っていますが「スポーツ文化研究所」でもよいのです。スポーツをテーマにした作家の作品も数多くあります。スポーツと文化は別次元のものではなく、互いの可能性を認知し融合してさらなる成長を遂げる道を歩むべきだと思います。友の会の皆さんとも知恵を出し合いながら共に進んでいきたいと思いま

#### ——葦平への思い出はありますか。

私が2歳の年に葦平は亡くなりました。記憶はありませんし、ずっと遠ざけてきました。戦争責任の問題や、やくざ映画化された「花と龍」などマイナスイメージがあったからです。しかし自分は何かと問いただし、50代になってようやく葦平を読みました。「九州文学」のリーダーとして豪放磊落な印象のある葦平ですが、父は葦平を「実は寂しい生活を送った孤独な文豪者だった」と評していました。その通りだったのだらうと思います。

が山積みで、本の背表紙で言葉を覚えました。おかげで世界中の文学に親しみましたが、文学の道に進もうとは思いませんでした。父は「常識を捨てて悪魔に心を売り渡さなくては、文学は書けない」とも話していました。



「チェルノブイリの祈り」スペトラーナ・アレクシエービッチがテキストになっている。

独創的な物語を次々に生みだしておられる村田喜代子さん(以下講師と記す)のお話をぜひ聴きたいと心の高鳴りを抱えて受講者たちは集った。今の時点で4回の講義が行われているので、私の素朴な感想を記したい。

講義では、作家のこと、彼の生きた時代の特徴、作品に書かれている状況などが詳述され、主題へと導かれる。飽くことのない探究心に基づき講師の語りは、社会・歴史から自然・化学の領域へも及び、思わず引き込まれてしまう。写真も提示されながらの具体的な多面的なお話は、丹念な資料収集や緻密な取材に支えられており、作品理解にとっても役立つ。私は講師の楽しい語り口と同時に、作品の主題に迫るときの鋭い指摘に心惹かれた。たとえば、現実を認識できるのは人間の知性と心しかないという講師の言葉は心に響いた。

この講座の受講は私にとって、村田喜代子さんの創作活動の秘密の一端を垣間見るようなドキドキする体験なのである。

(2019年11月23日に記す)

文学講座

「村田喜代子の文学いろいろ」受講記

三村 保子

北九州市立文学館主催  
この講座は8月から月1回、2月まで全7回で開催中である。

第1回「長崎の鐘」永井隆、第2回「おしいでこーい」星新一、第3回「セメント樽の中の手紙」葉山嘉樹、第4回「終末の日」星新一、第5回「ネバーホーム」レオ・ハント、第6回「やんごとなき読者」アラン・ベネット、第7回

「チェルノブイリの祈り」スペトラーナ・アレクシエービッチがテキストになっている。

独創的な物語を次々に生みだしておられる村田喜代子さん(以下講師と記す)のお話をぜひ聴きたいと心の高鳴りを抱えて受講者たちは集った。今の時点で4回の講義が行われているので、私の素朴な感想を記したい。

講義では、作家のこと、彼の生きた時代の特徴、作品に書かれている状況などが詳述され、主題へと導かれる。飽くことのない探究心に基づき講師の語りは、社会・歴史から自然・化学の領域へも及び、思わず引き込まれてしまう。写真も提示されながらの具体的な多面的なお話は、丹念な資料収集や緻密な取材に支えられており、作品理解にとっても役立つ。私は講師の楽しい語り口と同時に、作品の主題に迫るときの鋭い指摘に心惹かれた。たとえば、現実を認識できるのは人間の知性と心しかないという講師の言葉は心に響いた。

この講座の受講は私にとって、村田喜代子さんの創作活動の秘密の一端を垣間見るようなドキドキする体験なのである。

(2019年11月23日に記す)

映画と文学

「新田次郎原作映画」

松本清張、林芙美子などの北九州にゆかりのある作家の原作映画も多々あります。昨年では帯木蓮生「閉鎖病棟」、平野啓一郎「マチネの終わりに」等の作品が映像化されスクリーンでも楽しむことが出来ました。

当館でも昭和の文豪、新田次郎原作映画「ある町の高い煙突」(2019年6月公開)を1月18日より上映致します。この作品は「八甲田山」「剣岳 点の記」などに続く新田次郎原作の映像化10作品目となります。

1910年、日立鉱山の煙害と戦った地元村民たちの実話を描いた作品です。煙害に苦しみ、戦い、克服して

きた北九州の皆さまだからこそ共感する部分も多いのではないのでしょうか。主演は仲代達矢主宰【無名塾】の井手麻渡、そして渡辺大らの若手俳優を主力派俳優吉川晃司、渡辺裕之、小林綾子、名優仲代達矢が支えます。「天心」の松村克弥監督がメガホンをとった、見応えのある作品です。

また1月15日から21日まで北九州芸術劇場で「べてん師タルチエ」(仲代達矢主演)の【無名塾】公演も行われます。演劇公演と共に当館にて映画もお楽しみ頂きましたら幸いです。

(小倉昭和館館主 樋口智巳)



©2019KUMAGAWA

おすすめの本

『父を焼く―上野英信と筑豊―』

上野 朱著 岩波書店  
2010年8月27日発行

筑豊の記録を残すことに生涯をかけた記録作家 上野英信(1923―87年)を父にもつ著者によるエッセイ集である。著者は1956年に福岡市で生まれ、英信の1964年の「筑豊文庫」創設に伴い斃手の廃坑集落で育つ。現在は宗像市で古書店を経営している。

この書には、父英信と父を支えた母晴子の思い出、著者の幼い頃からの回想を交えた筑豊の暮らしとそこに住む人びとが描かれている。英信の葬儀の様相を綴った表題作「父を焼く」など二十七篇が収録されている。前者「蔵の家―上野英信と晴子―」(海鳴社2002年)の続編ともいえる。

上野英信は山口市生まれ、北九州市黒崎で育つ。学徒出陣後、広島で被爆。京都大学を中退して筑豊で炭坑労働者となり、谷川雁、森崎和江と共に労働者の文芸サークルを結成し、機関誌「サークル村」を刊行した。

著者は繊細であたたかな筆致で、両親と交流のあった人びとのことを、さまざまなエピソードを通して鮮やかに描き出す。酒でもてなす父英信、苦しい家計のなかから手料理に心を込める母晴子。両親に対する深い信頼が随所に滲んでいる。両親は誰もが差別されることなく生きられる世界を創るという夢を抱いていた。その夢に一歩でも近づく方法として父は書くことを選び、母は夫に書かせることを選んだと、著者は述べている。

この書には、著者の家族や筑豊に住む人の暮らしが感じられる写真が添えられていることも読者にはうれしい。カバーの版画は筑豊文庫に集った人びとが愛用した思い出の食卓。英信と晴子をよく知る版画家 山福朱美の作である。

(三村保子)



# 工事中に幻の天窓発見!!

文学館は2020年春オープンに向けて工事の真っ最中です。今回は、ちよっとだけ建物内をリポートします。文学館でも象徴的なテンドグラフですが何か気が付きませんか。

よく見ると交流ステーションの鉄骨がなくなっ、すつきりとした開放的な空間になった様子が見て取れます。2階の改修工事では、エレベーター天井を工事している石柱があり、その上に球体上の天窓が出現したそうです。屋上に上がって確認すると室外機に囲まれた天窓を発見!!



文学館になってから、天井では、天井でよさがれていたため、外からも見えず、誰も知らなかった秘密の天窓となりました! この建物の設計者である磯崎新氏の建築ファンには、なんとも残念なお知らせになります。この天井はまたまたふさいでしまえ、リニューアル後には見ることができません。そんな秘密の天窓はココ(下記写真)にあります。



# リレーエッセイ

## 車窓風景

加賀美清之

今でも、JRを国鉄、列車(電車)を汽車という。今では死語になったが、かつては、汽車を待つ君の横で僕は…(なごり雪)》《花嫁は夜汽車にのって…(花嫁)》であった。つづく昭和の人間だと思ふ。

汽車に乗る楽しみは車窓風景であり、進行方向の窓際座席から見える風景が好きであった。これから自分が進む路・風景が見える。ワクワクする自分がある。未知の世界を、いま見ているのだという高揚感。一方、その反対座席、進行方向と逆の座席から見える風景は、過去の。なつかしくはあるが、高揚感はない。当時そのように思っていた。

私は、昭和22年生まれ団塊の世代である。日本の復興と軌を一にし、高度成長時代の真つただ中を生きて来た。みんなと一緒に見ていた車窓風景は、「三丁目の夕日」である。日本経済は成長し続け、GDPが世界第2位にまで上り詰めた。この風景は永遠に続くのではないかと思われたが、何事にも永遠はない。バブルの崩壊。

深刻な景気後退。車窓風景は、大きく変わった。ちょうどその頃が昭和の終りであり、私の人生の折り返し点でもあった。平成は失われた10年、いや、20年、30年のまま終え、令和となった。その間、社会構造が大きく変化し、高度情報化社会、デジタル社会が到来した。確かに便利にはなったが、文明はすべての人を幸せにしたとはかぎらない。いつたい、どの程度思い通りに生きてこられたのか。心ばかり急いで走ってきたような気がする。今更ながら、進行方向とは反対の座席から風景を見たいと思うようになった。過去と現在が出会い、未来への展望が開ける座席から、選ばなかった人生が見えるかもしれない。

「自ら手漕ぎボートを漕ぎ、まっすぐ進むためには、進む方向とは反対側、後ろ向きで漕がねばならない」(ポール・ヴァレリー)。みんなと一緒にの汽車に乗り、前しか見えない座席から風景を見るのではなく、手漕ぎボートに乗り、進む方向とは反対側の風景を見ながら未来へ入っていく。昔前ならとつとに終わっていた人生だが、今や、人生100年という。まだ、夢を見る時間は十分に残っている。未来を信じてボートを漕ぎ続けよう。

# 会員投稿

## そもそもの始まり

森 荘八

私が今川館長に始めてお会いしたのは10年前のことである。当時、私は小倉北区の南丘市民センターに勤めていて、丁度松本清張生誕100年という年だったので、それにちなんで文学講座をやろうということになった。

ところが問題は、私「文学」についてはチンプンカンのなのである。そこで、市の担当課に相談したところ、文学館の今川副館長に相談したらということになった。

当時の館長は佐木隆三さん。副館長は市の職員と思ひ込みノコノコと訪ねて行ったところ、羨望な女性が現れ、それがなんと副館長の今川英子先生だったのである。私のノコノコムードが吹っ飛んだのは言うまでもない。

今川先生は、私のチンプンカンを察して、ピンからキリまで助言して頂き「松本清張生誕100年を記念して故郷の文学を辿りましょう」という謳い文句で、8回に亘る文学講座をスタートさせることが出来たのである。

そして、今川先生には北九州の文学と清張について講話して頂き、文芸評論家の安間隆次先生には松本清張を、北九州文学協会長の山下敏克先生には杉田久女を、それから森鷗外記念会の養父克彦先生と火野葦平館の玉井史太郎先生にも講話して頂くことになった。

先生方にお会いした時「市民センターが何の用?」という不審な眼差しが、今川先生の名前をだすとニコやかな眼差しに急変し、たちまち乗り気に…。今川先生って凄い!

昨年末にバス停で会った高齢の婦人から「森さんがやった文学講座、今でも覚えていますよ」と言われてビックリ。私、エラクになった気分になったけれど、これって今川先生のお蔭である。今川先生、有難うございました。

※私のホームページ「夢旅人」の昨年10月11日に文学館で開催された「西郷どん」のエッセイを掲載。森荘八で検索すれば出てきますので、お読み頂ければ幸いです。

